The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ディスコースの交錯にみる性的少数者と民族的少数者の集合的アイデンティティーその多層性の解明と社会的理解に向けてー
Author(s)	木場, 安莉沙
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/77559
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　　名　　（木 場　安莉沙　　）	
論文題名	ディスコースの交錯にみる性的少数者と民族的少数者の集合的アイデンティティ―その多層性の解明と社会的理解に向けて―

論文内容の要旨

1. 本研究の背景

本研究は、2014年～2016年に国内で性的少数者および民族的少数者を対象として行ったインタビューの他、2016年12月～2017年3月並びに2019年1月～3月にかけて行った米国サンフランシスコ近辺でのインタビュー調査に基づき、日本や米国社会に生きる少数者（主に日本人・日系人）のアイデンティティがどのようなディスコースの交錯の上に成り立っているかを明らかにするものである。日本では2019年2月に13組の同性カップルが婚姻制度を使えるよう国を相手取り一斉訴訟を起こした他、2015からこれまでに12都道府県および20の自治体において同性パートナーシップ制度が導入されるなど、近年性的少数者を取り巻く社会的状況は急速に変わりつつある一方、メディアにおける性的少数者の表象には依然として差別的なものが多く見られるなど課題も多く残る。また米国では2017年3月に、2014年にオバマ前大統領が連邦政府の契約業者に対し性的少数者の差別を禁止する目的で署名した大統領令が廃止されており、同時期に性的少数者が被害者となったヘイトクライムの件数は3%上昇したと報じられている。こうした潮流の中で少数者集団のアイデンティティや実態を把握することは、近年の排外主義的イデオロギーへの社会学的なアプローチを可能にするだけでなく、個人と集団の間の衝突や集団間の衝突を可視化し、回避方策を見出すことに繋がる。

2. 日本における性的少数者研究

原田（2005）や好井（2007）は、メディアにおける性的少数者の表象が、多数者の性的少数者に対する心理的態度を形成してきたことを指摘している。一方、そうした表象を差別として否定的に認識する人が増えていることもまた事実である（吉川 2017など）。しかし、2015年11月に発表された性的少数者に関する意識調査の結果によると、同性婚への賛否に関しては「賛成」「やや賛成」が51.1%と過半数であったのに対し、友人が同性愛者だった場合に「抵抗がある」と答えた人の割合は、男性の同性愛者だった場合で53.2%、女性の同性愛者だった場合も50.4%といずれも半数を超えており（NHK online: http://www3.nhk.or.jp/news/html/20151128/k10010322671000.html）、回答者の性別や年代、職種等によって賛否に偏りがあるものの、「社会的・制度的にはLGBTの存在を認めつつも、身近な存在としては抵抗感を感じている」実態を表す結果となった。

3. 日系アメリカ人研究

本研究でインタビューデータを扱う調査協力者の多くは日系アメリカ人ないし在米日本人である。日系アメリカ人の民族的アイデンティティは、世代やジェンダーによって多様かつ複合的であると言われている。また、しばしば第二次大戦中の日系人強制収容をめぐるディスコースがアイデンティティ構築にとって重要なファクターであるとみなされる。黒木（2006）や竹沢（1994）によれば、おおよそ一世は米国社会には従順でありながらも日本の文化や言語、価値観を重視し子孫にも継承する傾向にあった。この背景には一世が帰化不能外国人とされ1952年まで市民権を獲得できなかったことや、一世の英語通用度が低かったことがある。また、出身地が異なる一世を同胞意識で結び付け、日本人として意識させたのはアメリカ社会からの差別であるとも言われている。これに対して米国で生まれ育った二世は一世と比較してアメリカ国民としての意識を強く持つ傾向にあり、特に戦中・戦後は日系人に付されたスティグマから日系人であるというエスニシティを恥じたり秘匿しようとする者も多く、白人社会への同化傾向が強く見られた。その子孫である三世は日系人の歴史や民族的アイデンティティに関して無関心であるとも言われる一方、強制収容に対する補償問題に積極的に参与し、「アジア系アメリカ人」としてのアイデンティテ

ィを築き上げていった世代でもある。

4. 研究手法：ナラティブとアイデンティティ

本研究では対面相互行為に見られるディスコースを主な分析対象とするが、発表者はこれまでに、マスメディアに見られる性的少数者の表象についてアニメーション映画やバラエティ番組を対象としてディスコース分析を行っている（木場 2017、2018）。van Dijk（1993）が、社会的認知はディスコースと支配をつなぐ必要不可欠な理論的（そして経験的）「インターフェイス」であり、そうした社会的認知の無視こそが批判的言語学および談話分析の多くの仕事における主要な理論的欠点であると述べているように、ディスコースの作用を検討するためにはマスメディアのみでなく個人の語りを詳察し、個人の内部にある社会的認知を明らかにする必要がある。本研究において個人間の相互行為を主要な分析対象として扱うのはこのためである。

複数の先行研究により指摘されているように、アイデンティティには社会的集団に関連した集合的側面がある（Bourhis 1979、Tajfel 1981、Giles and Coupland 1991、van Dijk 1998、De Fina 2006など）。一方、Tajfelがアイデンティティは集合的であるだけでなく個人的レベルで表現されるため、このアイデンティティの2つの側面が完全に重複することはないと指摘するように、個人のアイデンティティに集合的側面があるからと言ってそこに個々の差異が存在しないわけではない。最後に、アイデンティティは人が特定の社会的相互行為の中で自分が誰であるかを表した時に意識されるパフォーマティブな行為（Erickson 1996、Schiffrin 1992、1993）であると複数の先行研究から明らかになっている。

5. リサーチクエスチョン

上記の内容を踏まえた上で、本論文では以下の4つのマイノリティグループを対象とし、民族的／性的ディスコースとして共有されるものを、集合的アイデンティティに関わるアイデンティティ・スキーマとして抽出した：①日本で生活する日本人性的少数者②日本で生活する性的／民族的少数者（「外国人」性的少数者）③在米日本人・日系アメリカ人（性的多数者）④日系アメリカ人の性的少数者。この上で、以下の3点を本研究のリサーチクエスチョンとして設定した。

1. 異なるレベル（集合的／個人的）のアイデンティティに、ディスコースはどのように作用するのか。
2. アイデンティティの多層性や、そのリソースとなるディスコースの交錯性はどのように相互作用するのか。
3. 日米社会において少数者はどのようなストラテジーでもってアイデンティティを獲得・展開・交渉し、それを変容を生き抜くための資源としているのか。

6. 方法と対象者

筆者はこれまでに国内で10人11組、米国（ベイエリア）では26人23組（同じ人物へのフォローアップインタビュー含む）からインタビューデータを収集している。予め用意した質問に答えてもらいつつ出来る限り自然な談話を収集するという目的から全て半構造化インタビューの形式で行い、ほぼ1対1で行ったがいくつかのインタビューは時間的な制限などから2人同時に行った。使用言語は日本語もしくは英語であった。

7. 総合考察

リサーチクエスチョン1について：　日系人強制収容が戦後から現在に至るまでの日系人に対する差別・排除を象徴するshared meaningとして多様な人々にアクセス可能なリソースとなっているように、“Japanese”アイデンティティも言語や文化の継承、戦争に関するファミリーヒストリーなどから交渉され、集合としての“Japanese”よりも多様で複雑な個人の民族的アイデンティティ構築を可能にする。ディスコースは集合的アイデンティティを形成しある程度スキーマ的なメンバーシップを定着させるものの、スキーマに該当しない個人がメンバーシップを交渉したり、多層的なディスコースをアイデンティティ構築の場に持ち込むことによって、スキーマ的に共有されたアイデンティティよりも多様で複合的なアイデンティティ構築が可能となる。

リサーチクエスチョン2について：　性的ディスコースと民族的ディスコースが交錯することにより、そのどちらかのアイデンティティの希求が妨げられる場合もあれば、両者の結びつきが促進される場合もある。ある民族的アイデンティティがある性的アイデンティティと両立せず、どちらかがもう片方の希求を妨げるアイデンティティとして構築されることもある。一方、日系アメリカ人の強制収容ディスコースが性的少数者の排除の経験と結びつけられるなど、「自己」と「他者」の融合に寄与することもある。このことは、その社会における歴史や政治的動向がアイデンティティの多層性に影響する可能性をも示している。

リサーチクエスチョン3について：　日本での調査では、集合的に共有されたスキーマは後景化され、性的アイデンティティはより個人的なものとして構築される傾向にあった。一方、日系アメリカ人の性的少数者は集合的アイデンティティを前景化する傾向があった。アジア系アメリカ人が社会的・政治的・経済的な連帯の必要性から「汎アジア系」というアイデンティティを採用してきたように、ベイエリアにおける「クィア」アイデンティティ選択の背景にも連帯への志向性がある可能性がある。また、制度や他者に対する自己の位置づけ・意味づけだけでなく、語り手による自分自身への位置づけ（Bamberg 1997）もまた、アイデンティティの「はざま」に在る人々が交錯するディスコースの中で自己の領域を同定し、複合的な自己を構築するのに必要であり、「生きのびる」（黒木 2012）ために必要である。「生きのびる」ことにもまた、集団として／個人として生きのびるという、集合／個人の2つのレベルが存在すると言える。

8. 結論

日系コミュニティおよび日米クィアコミュニティにおいて必要なのは、差異を認識する／させることを連帯を分断するものとして捉えるのではなく、また統合的なアイデンティティを共有することを「連帯」と捉えるのではなく、各人に多層的なアイデンティティがあり尚且つそれぞれの集団が「はざま」にあるアイデンティティによって橋渡しされているというような、そうした緩い連帯での繋がりを意識することではないだろうか。そもそも今ある「連帯」の形態が差異の排除に向かっていないか、抑圧的なヒエラルキーに加担していないかを今一度見直し、先鋭化された「真正性」を目指すのではなく「はざま性」の包摂を志向することが望ましい。

本論文で分析したディスコースやアイデンティティはいずれも特定の時代および社会に根差したものであり、今後の社会情勢や時代の変遷と共にアクセス可能なディスコースは移り変わり、これに伴い人々のアイデンティティも様々に交錯し異なる複合性を展開してゆくだろう。その時代・社会に応じた人々のアイデンティティ構築と、「生きのびる」戦略を論じ続けてゆく必要がある。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　木場　安莉沙　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	准教授	秦　かおり
	副 査	准教授	小川　敦
	副 査	教　授	山下　仁
	副 査	教　授	森　祐司

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本国内および米国サンフランシスコ近辺でのフィールドワークで得たインタビュー・ナラティブを基に、日本や米国社会に生きる性的少数者および民族的少数者のアイデンティティがどの様なディスコースの交錯の上に成り立っているのか、談話分析の手法を用いて微視的に分析し、その多層性を明らかにした意欲作である。

本論文は全８章で構成されている。まず第１章では、本研究の背景である近年の性的少数者への社会的状況の変化と急速に台頭してきた排外主義的イデオロギーやそれに伴う差別の増加について実例を挙げて概説している。続く第２章では、性的少数者と日系アメリカ人に関する先行研究を理路整然とまとめており、殊に日系アメリカ人の民族的アイデンティティと強制収容所のディスコースとの関連はこの後のインタビューにおいてもしばしば登場するものであり非常に興味深い連鎖を示している。さらに第３章では、これまでの研究の問題点としてグループとしてのアイデンティティを形成する類型的なストーリーやスキーマ分析の不足を挙げ、本論文の目的をアイデンティティ・スキーマの抽出から集合的アイデンティティを理解し、集合的アイデンティティと個人のアイデンティティとの関係を探ることとしている。方法論を示した第４章では、研究方法の概要を説明し、用語の詳細な概説、研究対象者の基礎情報、フィールドワークの概要、リサーチ・クエスチョンの設定を行なっている。特徴的な点は、分析において研究協力者（国内で10人11組、米国では26人23組（同じ人物へのフォローアップインタビュー含む））を４つのマイノリティ・グループに分割し、民族的／性的ディスコースとして共有されるものを、グループ・アイデンティティに関わるアイデンティティ・スキーマとして抽出した点である。

以降の第５章と第６章は分析結果とそのまとめであるが、国内調査では性的少数者間における様々な軋轢、齟齬、排除を取り上げ、そこに顕在化するアイデンティティを詳細に分析している。多数者対少数者ではなく少数者間の排除や他者化を分析によってつまびらかにしている。また、米国での調査においては強制収容所、“Japanese”アイデンティティ、“queer”アイデンティティという日系アメリカ人インタビュイーのアイデンティティを構成する3つの主要なファクターを取り上げ、新規的な分析を行なった。例えば強制収容所の語りにおいては戦後もなお社会的コンテクストに合わせてこの体験が日系２世３世のエスニック・アイデンティティの基盤の構築に寄与していることを分析から証明した。第７章では、総合考察としてリサーチ・クエスチョンの解を検討し、第８章で結論に至っている。

本論文は、性的少数者かつ民族的少数者など、これまで着目されてこなかった少数者の言葉に耳を傾けることによって、多様で複合的なアイデンティティの構築プロセスを解明し、その多層性を描き出すことに成功しており、高く評価することができる。また、現代社会において少数者集団や個人のアイデンティティの実態を把握し、様々なコンフリクトを可視化しながら衝突を回避する方策を探る本研究は意義深いものである。その研究目的、意義は十分に達成しているが、分析部分の概説的説明の不足による全体像の把握のし辛さ、“queer”概念への踏み込みなどいくつかの課題はあるが、それらは本論文の更なる発展のための課題であり、本論文の価値を損なうものではない。

以上のような理由で、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。

なお、チェックツール“iThenticate”を使用し、剽窃、引用漏れ、二重投稿等のチェックを終えていることを申し添えます。